

調査の実施概要

②保護者調査の概要

保護者調査に関しては、おおよそ以下のような結果が得られた。

◇8割以上の保護者が「家庭の教育力が不十分」だと認識

8割以上の保護者は「家庭のしつけ」が不十分だと考えている。これに対して、「学校のしつけ」が不十分だと考える保護者は約5割に止まる。学校でのしつけが家庭ほど不十分だと考えていないのか、あるいは学校でしつけを行うことがイメージされないのか、いずれにしても学校のしつけに関しては、不十分だと考える者とそうでないと考える者とが均衡状態にあり、意見がわかれるようなのである。

◇約7割の保護者はしつけに自信ありと認識

約7割の保護者はわが子のしつけに対する自信はある程度持っているが、約3割は自信を持っていない。特に、給与所得者に自信のない者が多く見られる。おそらく、回答者の母親も給与所得者である共働き家庭のため、わが子とふれあう機会が少ないことがその理由だと考えられる。

◇8割強の保護者は家庭のしつけ不足が非行等の原因だと認識

近年の教育問題に対する意識を見ると、非行など反社会的行動や不登校など非社会的行動に関わる基本的なしつけについては、保護者の86%が家庭のしつけ不足が原因だと認識しているが、学力低下については家庭に原因を求める者は55%に止まる。学力に関しては家庭というよりも学校の責任だと捉えているのであろう。

◇9割以上の保護者が基本的生活習慣のしつけは家庭の役割だと認識

しつけに関する役割分担意識を見ると、早寝・早起きなどの基本的生活習慣のしつけは、9割以上の保護者が家庭の役割だと認識しているが、他者との協力や差別しないなど社会的行動に関するしつけについては、学校の役割だと認識する傾向が強い。そして、地域社会への貢献など社会参加に関わるしつけでは、地域社会の役割だという認識が他のしつけよりも若干強く表れている。

◇善悪まじるなど規範意識のしつけは行うが、家事分担などのしつけは今ひとつ

保護者によるしつけの実態については、「悪いことをしたら叱る」「よいことをしたら必ずほめる」「善いこと・悪いことをしっかり教える」など規範意識に関しては、100%近い保護者がしつけていると回答している。しかし、「テレビゲームの時間を決めている」「家事を分担させている」「持ち物を確認する」など日常生活面の行動に関するしつけは、6割前後の保護者が行っていないようである。

◇多くの保護者は、規範意識よりも自立性に問題があると認識

保護者から見たわが子の行動特性を見ると、「先生の言うことに素直に聞く」（「とても当てはまる」50.0%）に比べて、「親の言うことに素直に聞く」子（同31%）はかなり少なめになる。親の存在が軽くなっているのだろうか。また、「決められたルールを守る」など規範意識は著しく低下しているとは言えないが、「早寝・早起きができる」など自立性に関してはかなり低下している様子が見られる。これら規範意識や自立性、そして「友達が多い」など社交性に関しては学年進行に伴って低下する傾向が見られた。

◇地域との関わりが希薄な保護者

保護者の普段行動については、「ゴミやタバコのポイ捨てをしない」など社会的ルール違反に関しては9割の保護者が遵守している。しかし、「夫婦の会話を大切にしている」のは7割にとどまる。また、住んでいる地域への関わりに関しては、「子育てサークルや子ども会活動に関わっている」(38%)、「近所の子どもの面倒をよくみている」(48%)と半数を割っている。保護者の地域との関わりは十分でないようである。

◇「住民の連帯意識が強い」に対して、「そう思う」はわずか7.5%と少ない

「地域の自治会活動は盛ん」だと言う保護者は65%(「そう思う」+「ある程度そう思う」の合計値)である。また、「住民の連帯意識が強い」と回答したのは4割弱(同)。これら設問に対して「そう思う」のみの回答に絞ると、「住民の連帯意識が強い」は7.5%と極端に低くなる。地域にもかなり問題があると言えよう。

◇保護者の8割は担任がわが子を理解していると認識

学校との関わりに関しては、「学校は地域や家庭によく情報を提供してくれる」に対して、「そう思う」の回答は16%程度。それに、「ある程度そう思う」を加えても、約7割にとどまる。学校の情報提供の取り組みに不十分さがあるかも知れない。また、わが子の「担任はわが子のことをよく理解している」に対して、「そう思う」は27%で、「ある程度そう思う」を加えると8割強になる。担任の児童生徒理解はまあまあというところであろう。

◇保護者の4割が学校にクレーム

保護者の学校参加の程度については、「運動会や授業参観などの学校行事によく参加する」のは9割以上。しかし、「保護者会・懇談会」になると、参加するのは約8割弱に減少している。また、「問題があったときには学校に意見や苦情を言う」保護者は39.3%である。保護者のクレームが問題視されている今日であるが、クレーマーは4割程度という実態にある。

◇わが子の学校生活の相談相手はわが子の友達の親だが、しつけの相談相手は自分の親

わが子の教育相談相手としては、学校生活に関しては「わが子の友達の親」が43%と最多になっている。しかし、わが子のしつけ方に関しては、「自分の親」が最多になり(35%)、自分の日常生活の悩みに関しては「自分の友人」が多い(45%)。また、教育や子育ての情報収集相手としては、「わが子の友達の親」が多くなる(44%)。このように相談相手は相談内容によって変わるが、「わが子の友達の親」の存在が相対的に大きい。

◇約9割の親が、家庭の教育力を高めるには「親が手本を示す」ことが大切だと認識

家庭の教育力を高める方策については、9割弱の保護者は「親が子どもの手本になる」と回答している。地域の教育力を高める方策としては65%が「大人が子どもの手本になる」と回答している。このことから、保護者の多くは、親や地域の大人が子どもの手本になるよう振る舞うことが家庭や地域の教育力を向上させることにつながると認識しているようである。

(佐藤 晴雄)

調査の実施概要

③児童生徒調査の概要

児童生徒用調査は、小学3年、5年、中学2年生、計3095人を対象に行われ、大きく分けて13の設問に沿って回答された。家庭、学校、地域での教育がそれぞれの子どもにどのような影響を与えているのかを、子ども自身の視点から調査したものである。以下10項目に分け、それぞれの概要を述べる。

1 基本的な属性

学年別に見ると、976人が小学3年生、958人が小学5年生、1156人が中学2年生であり、回答者の52.4%が男子、47.5%が女子児童生徒であった。兄弟数は、2人が54.9%で最も多く、次いで3人の26.2%となっている。祖父母と同居しているのは、全体の24.3%であった。

2 生活の基本は、誰からどのようなことを教わっているのか

親からは、早寝早起き(61.0%)などの生活習慣を教わっている。また、学校の先生からは、友だちと協力する(37.7%)などの集団生活に関わる事柄が挙げられた。その一方で、地域の大人は殆ど影響を与えていない(郷土を愛する気持ちの3.6%が最高)ことが分かった。誰からも言われぬという事柄は、郷土を愛する(71.0%)、将来の夢を考える(63.3%)、社会のルールを守る(59.8%)が非常に高い。

3 自分をどのような子どもだと思うか

自分自身を、友だちが多い(88.0%)、自分のことは自分です(84.5%)、善悪の判断がつく(82.1%)と考えている子どもが多いのに対して、地域の活動に参加している(38.9%)、早寝早起きをしている(54.0%)、自主的に勉強している(57.0%)と考えている割合は少なかった。地域への関心が薄く、自ら勉強しないことを認識している点が特徴的である。

4 子ども自身の規範意識

自身の規範意識14項目について尋ねたものである。特定の行為に対して、「絶対にしてはいけない」「あまりしてはいけない」「場合によっては構わない」「構わない」から選択する。学年とクロスさせ、それぞれを比較すると、学年が上がるごとにすべての規範意識で低下が見られた。その中でも、「うそをつく」が、小3(87.8%)→小5(67.7%)→中2(48.0%)と最も大きな低下を示している。

5 誰から、どんな場面で叱られるか

親から叱られると回答した児童生徒の数が最も多く、「片付けをしなかった」80.4%、「約束を守らなかった」68.1%、「うそをついた」65.4%、学校の先生から叱られるものとして、「勉強をしなかった」(35.2%)、「友達と喧嘩をした」(33.0%)、「決められたことをしなかった」(32.0%)が挙げられた。誰からも叱られない事柄には、「友だちと喧嘩をした」(36.3%)が最も多く、「ゴミを道に捨てた」(32.3%)、「挨拶をしなかった」(26.6%)がそれに続く。近所の大人から叱られるのは、「ゴミを道に捨てた」(19.2%)と、「挨拶をしなかった」(4.2%)以外は殆ど見られなかった。親や学校の先生と比べて少数であるが、地域の目を気にしているのは、ゴミを道に捨てる時である。

6 親から褒められること

最もよく褒められる事柄として「勉強して成績が上がった」が各学年で共通している（小3：40.1%、小5：38.9%、中2：47.6%）他、上位5番目以内までに挙げたもの（友達と仲良く遊べた、お年寄りに席を譲った、毎日お手伝いをした、身の回りをきれいに整理した）は、それぞれの学年で順位に変動はあるものの、すべてに共通しており、学年が上がっても親は同じことについて褒めるということが明らかとなった。

7 先生から褒められること

親と同様、上位5番目まで順不同はあるものの各学年とも共通している。すなわち、学年が上がっても、先生は同じことで児童生徒を褒めている。最も多いのは、小3：友達と仲良く遊べた（21.0%）、小5：日直や係の仕事をきちんとした（22.1%）、中3：勉強して成績が上がった（28.0%）であるが、「悪いことをしても正直に話す」、「挨拶をしっかりとした」も上位に入っている。

8 近所の大人から褒められ、叱られた経験

叱られた経験については、「全くない」（40.5%）が最も多く、次いで「あまりない」（38.3%）、となり、殆どの子どもは近所の大人から叱られた経験が殆どない。どのような場面で叱られたかについては、「決められたことをやらなかった時」（40.1%）が最も多く、「騒いではいけない所で大声を出した時」（11.1%）、「嘘をついた時」（11.0%）が続く。一方、褒められる頻度は、「時々ある」（51.7%）が最も多く、近所の大人は子どもを褒めるが、叱ることはめったにないことが明らかとなった。

9 学校以外での生活について

中学生になると極端に地域とのつながりが薄れてくる（地域の行事によく参加する—小5：63.7%→中2：43.4%）。また、「自分に自信がある」は、学年が進むごとに極端に減少していた（小3：56.0%→小5：35.7%→中2：12.9%）。一方、「むかつくことがある」は、学年が上がるにつれて増加している（小3：55.2%→小5：59.6%→中2：66.4%）。

10 家族とのかかわり

学年ごとに比較すると、中学生になると家族と出かける機会が極端に少なくなっている（週2回以上出かける割合—小3：44.7%、小5：31.7%、中2：9.5%）。また、家族との1日の会話時間については、学年が上がるに従ってかえって増加傾向にある（30分以上会話する—小3：63.2%、小5：75.6%、中2：77.4%）。

調査から、子どもの教育には家庭の影響力が最も大きく、集団生活の基本的姿勢は学校から得ていること、一方で地域は子ども自身も関わりをあまり持たないため、殆ど影響を与えていないことが明らかとなった。地域が子どもの教育に今後、どのような形で関わっていくことができるのかが大きな課題となるであろう。

（金山光一・大谷 杏）

調査の実施概要

④教職員調査の概要

本調査における教職員編の回答者数は 306 名である。教職員編の設問趣旨は、学校やそこに勤務する教員がどのように子どもや保護者、また地域を見つめているかを把握するものである。問 1 から 12 までの設問の中に、いくつか特徴的な結果を見出すことができた。それを 10 のポイントにまとめた。

◇ポイント 1 家庭でのしつけに対する意識

「家庭で十分な『しつけ』がなされていない」という質問に対して、「そう思う」（とてもそう思う+ある程度そう思う）の回答が 8 割を超えている。この問いは保護者調査でも、ほぼ同様の数字を示している。教職員も保護者自身も家庭における「しつけ」の現状は不十分であると受け止めている。

◇ポイント 2 しつけの役割分担意識

基本的な生活習慣・社会性のしつけに関する 11 項目について、しつけをどこが行うべきかと実際にどこが行っているかを尋ねた。その結果、あいさつのしかた、善悪の判断、我慢する態度は、家庭でしつけを行うべきであるのに、実際には十分しつけられていない項目としてあげられている。

◇ポイント 3 児童生徒の意識と行動に対する見方

教職員が児童生徒の意識や行動に関して以前よりも増えていると感じていることを 20 項目について聞いてみた。小中学校ともに圧倒的に数字が高いのは『殺す』『死ぬ』『うざい』など言葉の乱れである。言葉が人間関係に及ぼす影響を考えると学校のみならず、地域・家庭を含む社会全般の喫緊の課題である。

◇ポイント 4 対保護者観

教職員が保護者のことで日ごろ感じていることについて、15 の質問項目を設定して聞いてみた。その結果、「とてもそう思う」の回答が一番多かったのは、「教育熱心な家庭とそうでない家庭の二極化が進んでいる」であった。保護者の意識・理解の格差によって困惑している様子が読み取れる。

◇ポイント 5 自分の職業に対する意識

教職員が勤務する学校のことや教職員自身のことについて 12 の項目について聞いてみた。その結果、9 割を超える教職員が教師になってよかったと思い、9 割近くが教育活動に関わることを誇りであると考えているが、8 割近くが仕事に悩みを感じ、さらに、5 割近くが教師としての指導力に自信がないと回答している。

◇ポイント 6 対地域観

教職員が勤務する地域の様子について聞いてみた。その結果、9 割近くが「地域は学校に協力的である」と回答している。教科学習や学校行事等において協力関係が定着し、学校と地域の距離感が縮まっていることが数字に表れている。

ポイント 7 家庭教育支援の方策

家庭教育支援のために学校が努力すべきことを 10 の項目から 3 つまであげてもらった。

それによると「配慮を要する家庭に対して、関係諸機関と連携しながら支援していく」が、他の項目に比べて突出して高い数字であった。一方、「PTA活動の活性化」は低く、教職員とPTAの相互理解や協働の視点を考えるとやや残念な結果である。

◇ポイント8 地域教育力の向上方策

地域の教育力の向上のための方策について、10の項目の中から3つをあげてもらった。その結果を見ると、「大人が子どもの手本になる行動をとるよう努める」「大人が他人の子どもでも悪いことを叱り、よいところをほめるよう努める」の回答が圧倒的に多く、日常生活における大人から子どもへのアクションを求めているといえる。

◇ポイント9 小学校教員と中学校教員の意識差

小中学校の教職員の考え方の差異が本調査結果にも表れている。小学校の教師に比べ、中学校教師は、保護者・地域に対する見方が厳しい。また、小学校教師の方が、しつけに対しての責任を感じているようだ。小学校の寄り添う指導、中学校の自立を促す指導といった指導観・教育観が表れているようだ。

◇ポイント10 自由回答の考察

本調査に寄せられた60の自由回答を類型化してみた。これらを①家庭教育以前に親の教育が必要である ②夫婦関係の課題が子育てに影響している ③家庭機能を補完すべき地域の人間関係が希薄でその教育力を期待できない ④愛情を子ども達にかけてほしい の4つの観点でまとめた。いずれの回答からも、学校が苦勞している状況が伝わってきた。

以上が、家庭教育に関する意識調査の教職員編の要約である。教職員を多忙にさせている要因のひとつに、家庭の教育力の低下があることはいうまでもない、学校・家庭・地域の教育責任の分担が指摘されるが、実際には、学校が家庭ですべきことを肩代わりしている現実が浮かびあがった。家庭の教育力再生のための方策が急務であるといえる。

(堀越 幾男)

調査結果の考察

第4章 しつけ良好な保護者の特性

—どのような保護者がしつけに成功したか—

本稿では、保護者調査中の「わが子の『しつけ』はうまくいっている方である」という設問に着目し、その他関連する設問とクロス分析を行うことによって、「しつけ」がうまくいっていると回答した保護者の特性を析出するものである。

なお、その場合、『しつけ』がうまくいっているか否かについては、「そう思う」保護者は「しつけが良好な保護者」とし、「そう思わない」保護者を「しつけ不全な保護者」と表現してある。その回答については、「とても」＋「少し」の回答を「そう思う」とし、「あまり」＋「まったく」の回答を「そう思わない」として、それぞれの合計値を示した。

1. 保護者の属性

まず、「しつけがうまくいっている方である」という設問に対して、回答者である保護者の年代毎に、「そう思う」（しつけがうまくいっている）と「そう思わない」（しつけがうまくいっていない）の回答値の比率を示すと、表4-1の左側のようになる（「列」を100%として計算）。

(1) 保護者の年代—しつけ良好な保護者の方がやや年齢が高い—

表を見ると、「20代」と「60代」の数値が極端に低いので除外すると、「そう思う」の場合、「40代」が72.7%と最高値になるのに対して、「そう思わない」では「30代」の32.2%が最高値を示している。つまり、しつけ良好な保護者（「そう思う」回答者）は、しつけ不全な保護者（「そう思わない」の回答者）に比べてやや年代が上のである。

(2) 子どもの数—しつけの良否と子どもの数は無関係—

次に、子どもの数別に見ると、「そう思う」はいずれの人数でも70%前半に止まり、子どもの人数としつけの良否との間にはほとんど関係性が見られない。しばしば一人っ子は、しつけができていないと言われるが、保護者の意識から見た限り、子どもの数としつけの成否と子どもの数には関係性が見られないのである。

表4-1 保護者のしつけの良否と自身の年齢／子どもの数 上段数値=実数(人)

わが子の「しつけ」 はうまくいっている 方である	保護者の年齢					子どもの数			
	20代	30代	40代	50代	60代	1人	2人	3人	4人以上
そう思う	4 66.7%	618 67.8%	1042 72.7%	81 70.4%	8 72.7%	230 73.2%	967 70.0%	469 71.4%	83 70.9%
そう思わない	2 33.3%	294 32.2%	391 27.3%	34 29.6%	3 27.3%	84 26.8%	415 30.0%	188 28.6%	34 29.1%

(3) 保護者の職業—しつけ良好な保護者には、会社経営・専業主婦・自営業が多い—

今回は、保護者の職業別に見ると(表2左)、「そう思う」の回答(上段)にのみ注目すると、数値の高い職業は「自営業」の80.0%である。次いで、「専業主婦」74.4%、「会社経営」74.2%が続き、「給与所得者」は67.5%と非常に低い数値を示した。回答者の多くは母親であることから、「給与取得者」には夫婦共働きか、母親との一人親家庭が多くなり、それら家庭では親がわが子と触れあう機会が自営業や専業主婦などに比べて少ないことが原因しているものと推測できる。

表4-2 保護者のしつけの良否と職業/家族形態 上段数値=実数(人)

わが子の「しつけ」 はうまくいっている 方である	保護者の職業					家族形態			
	専業主婦	給与所得者	自営業	会社経営	その他	子どもとのみ生活	子と祖父母と同居	親戚と同居	その他
そう思う	659 74.4%	819 67.5%	120 80.0%	23 74.2%	132 67.3%	1199 70.7%	421 71.6%	5 62.5%	117 70.8%
そう思わない	227 25.6%	394 32.5%	30 20.0%	8 25.8%	64 32.7%	497 29.3%	167 28.4%	3 37.5%	52 29.2%

(4) 家族形態—しつけの良否は家族形態はあまり関係がない—

家族形態別では、「子どもとのみ生活」70.7%と「子どもと祖父母と同居」71.6%の間には数値の差がほとんど見られない(表4-2右)。巷間、「子どもとのみ生活」している核家族がしつけ面で問題視されがちだが、この数値から見る限り、少なくとも、保護者のしつけの成否という点では核家族を問題視することはできないことがわかった。換言すれば、三世代家族「子どもと祖父母と同居」)だからと言って、しつけがうまくいくと言う根拠は見あたらなかったのである。

(5) PTA役員等の経験の有無—しつけ良好な保護者の方がPTA役員を経験している—

表4-3 保護者のしつけの良否とPTA役員経験等/子どもの学年 上段数値=実数(人)

わが子の「しつけ」 はうまくいっている 方である	保護者のPTA役員等の経験			子どもの性別	
	現在、役職に就いている	以前、役職に就いていた	役職経験はない	男	女
そう思う	593 75.9%	812 70.5%	348 64.0%	868 71.4%	887 70.3%
そう思わない	188 24.1%	399 29.5%	196 36.0%	348 28.6%	375 29.7%

保護者のPTA役員等の経験の有無との関係から見ると(表4-3左)、「そう思う」では、「現在、役に就いている」75.9%、「以前、役職に就いていた」70.5%、「役職経験はない」64.0%となり、現在、役職についている保護者の数値が高く、反対に、役職経験のない者の数値が低くなっている。PTAの役職等に就く保護者はそれだけ教育やしつけに熱心であるからであろうが、保護者の職業にも関係しているであろう。つまり、「そう思う」割合が相

対的に低かった給与所得者は、PTA の役職等に就く時間的・肉体的余裕がないと考えられるからである。

(6) その他—子どもの性別・学年・子ども会等への所属の有無はほとんど関係がない—

そのほか、子どもの性別(表4-3右)、子どもの学年(表4-4左)、子ども会等への所属の有無

表4-4 保護者のしつけの良否とわが子の子ども会等への所属の有無 上段数値=実数(人)

わが子の「しつけ」 はうまくいっている 方である	子どもの学年			わが子の子ども会等への所属		
	小3年	小5年	中2年	全体	以前所属し ていた	所属してい ない
そう思う	583 69.8%	601 72.0%	573 70.7%	1757 70.8%	222 68.5%	935 69.0%
そう思わない	252 30.2%	234 28.0%	237 29.3%	723 29.3%	102 31.5%	420 31.0%

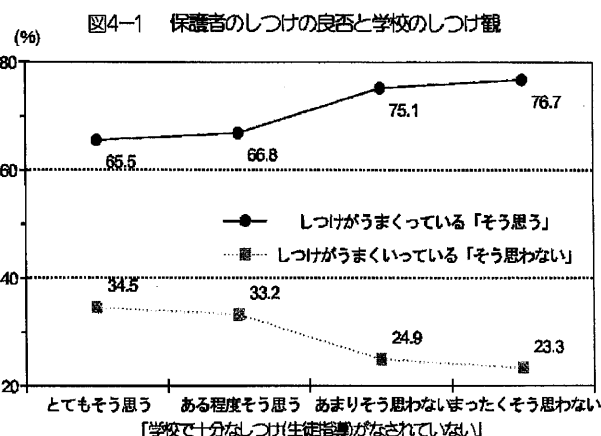
2. 保護者の教育やしつけに対する見方

調査では、最近の学校・家庭・地域による「しつけ」機能に関する質問を行ったが、ここでは「最近の子どもたちは、学校で十分なしつけ(生徒指導)がなされていない」という設問を取り上げてみた。この設問の回答と保護者のしつけに対する自信の有無をクロスさせ、学校でのしつけ(生徒指導)に関する設問の選択肢毎に、しつけ良好な保護者(「しつけがうまくいっている」=「そう思う」の回答者)としつけ不全な保護者(「しつけがうまくいっていない保護者」=「そう思わない」の回答者=)の回答の割合を图示してみた。

(1) 学校のしつけ(生徒指導)に対する評価—しつけ良好な保護者の方が学校のしつけ(生徒指導)不足を問題視しない傾向にある—

そこで、図4-1を見ると、「学校で十分なしつけ(生徒指導)がなされていない」に対して、「とてもそう思う」と回答した者のうち、しつけ良好な保護者は65.5%であるのに対して、しつけ不全な保護者は34.5%と低い。両者の差は約30ポイントに止まっている。ところが、「学校で十分なしつけがなされていない」に対して「あまりそう思わない」及び「まったくそう思わない」の回答者について見ると、両者の差は拡大してくることがわかる。「まったくそう思わない」では、「しつけがうまくいっている保護者」の76.7%に対して、「うまくいっていない」は23.3%にまで低くなり、両者の差は約54ポイント以上に拡大している。

ようするに、しつけ良好な保護者ほど学校のしつけが不十分だと考えない傾向にあり、しつけ不全な保護者ほど学校のしつけが不十分だと考える傾向が見られた。その意味で、しつけ不全な保護者は

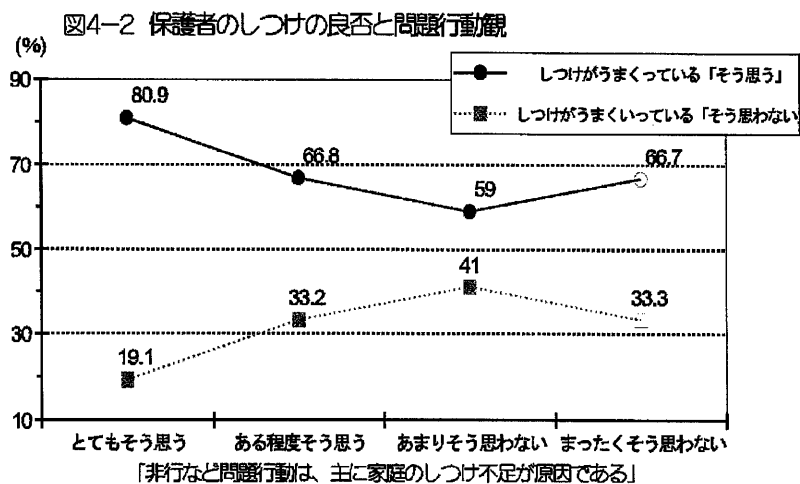


しつけ(生徒指導)機能を学校に依存する傾向が強いと解されるのである。

(2) 子どもの問題行動のとらえ方—しつけ良好な保護者の方が問題行動の原因を家庭に求める傾向がある—

保護者は非行など問題行動の原因をどう見ているのか。調査では、「非行など問題行動は、主に家庭のしつけ不足が原因である」という質問を設け、回答してもらった。

図4-2は保護者のしつけの良否と問題行動の原因に関する回答をクロスさせたものである。この図によると、問題行動の原因が家庭のしつけ不足だと「とてもそう思う」の回答値のうち、しつけがうまく言っている良好な保護者が80.9%を占め、しつけ不全な保護者は19.1%と大きく開いているが、問題行動の原因が家庭のしつけ不足だと「あまりそう思わない」者では、しつけ良好な保護者59%、しつけ不全な保護者41%と両者間の差が小さくなる(なお、「まったくそう思わない」の回答者が18名であることから、この回答値を除外しておく)。



このデータからは、しつけ良好な保護者ほど問題行動の原因を家庭のしつけ不足に求め、しつけ不全な保護者ほどその傾向が弱くなると言える。前出の学校のしつけに関するデータを合わせて考えると、しつけ良好な保護者は、学校のしつけ機能が現状で十分だと考え、あるいはそれに満足しているが、問題行動などの原因が家庭のしつけ不足に原因すると捉える傾向にあることがわかる。

むろん、その場合、しつけ良好な保護者はしつけがうまくいっていると考えているため、問題行動の原因については自分以外の他の家庭のしつけ不足があると認識していることになる。言い換えれば、しつけ良好な保護者は、「うちはしっかりしつけているが、問題行動を起こす子どもを抱える他家ではしつけがちゃんと行われていない」と考えるのであろう。

3. 保護者のしつけの様子—しつけ良好な保護者の方が、善悪を教え、ほめることを忘れず、わが子の日常生活に気配りをしている—

実際に、しつけが良好な保護者ほどどのようにわが子をしつけているのか。しつけに関する15の調査項目の回答としつけの良否をクロスさせると、図4-3のような結果になった。

まず、「善いこと／必ずほめる」、「悪いこと／叱る」、「善悪を教える」など規範意識に関わる項目についてはいずれも 90%を上回り、しつけの良否に関わらず高い数値を示している。また、「朝ご飯をつくる」という日常生活に関わる項目も両者とも数値が高い。

一方、数値の低い項目は両者の間に数値の開きが見られる。たとえば、「家事を分担させている」、「ゲーム等の時間を決めている」の2項目は10ポイント以上の差異が見られ、「持ち物を確認する」と「年長者を尊敬するよう教える」は7ポイント以上の差があり、しつけ良好な保護者の数値が高い。そのほか、「なるべく自分でやらせる」、「食事・服装に気を遣っている」などの数値に開きがあり、同様にしつけ良好な保護者の数値が上回る。

図4-3 保護者のしつけの良否としつけの様子

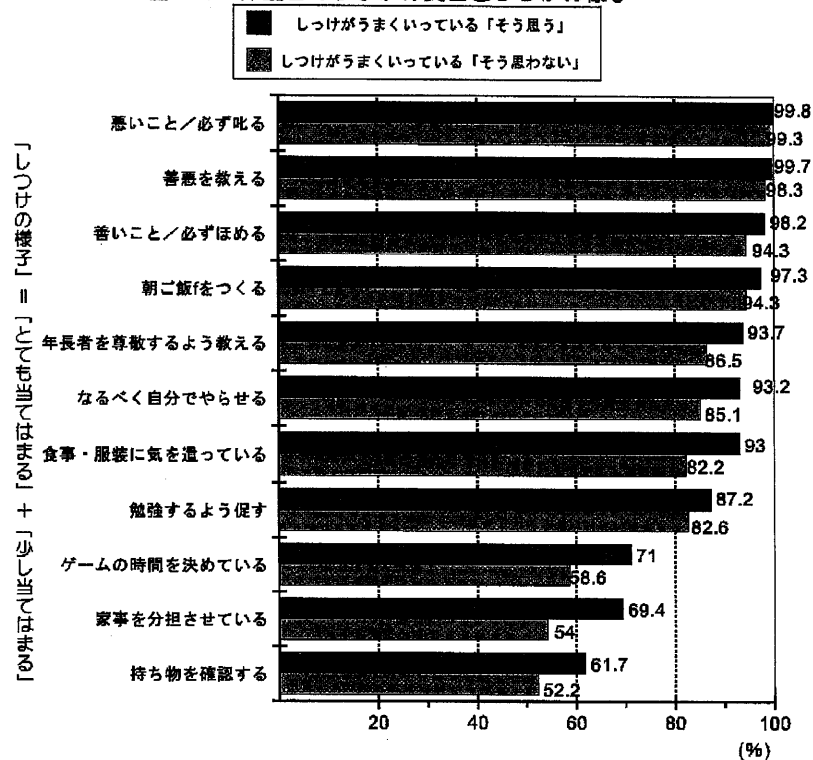
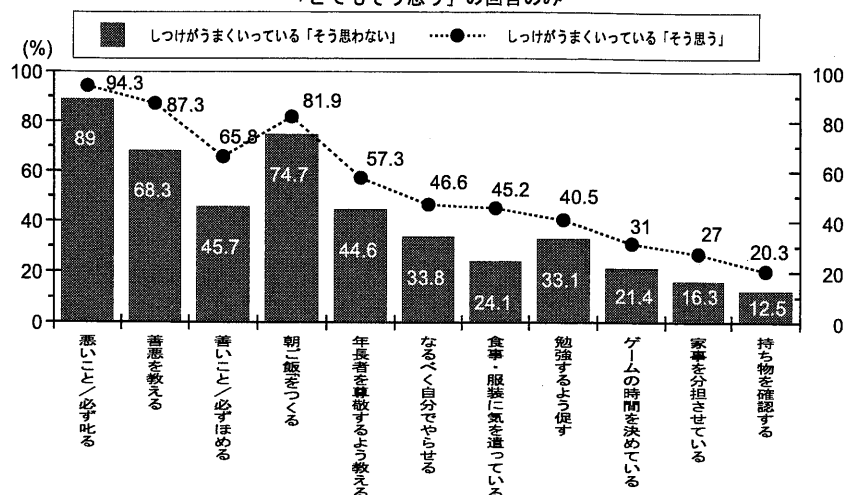


図4-3の「しつけの様子」の数値を「とても当てはまる」のみに絞って見ると、図4-4のようになる。しつけ良好としつけ不全の両者を比較しやすいように図のスタイルを変えてあるが、この図のうちの折れ線がしつけ良好の保護者の回答で、棒がしつけ不全の保護者の回答を示している。この図をみてすぐに分かるように、その両者の数値の差がより広がっていることがわかる。まず、「善悪を教える」および「善いこと／ほめる」という規範意識に関する項目は図4-3ではほとんど差がなかったが、「とてもそう思う」の回答に限定すると、両者の値が著しくなる。しつけ良好な保護者は、そうでない保護者に比べて、善悪をしっかり教え、ほめることも忘れていないのである。「朝ご飯」に関しては、「とても当てはまる」のみの回答に絞ると、しつけ良好な保護者が 81.9%であるのに対して、しつけ不全な保護者は 74.7%と低くなる。

図4-4 保護者のしつけの良否としつけの様子
 - 「とてもそう思う」の回答のみ -



そのほか、「悪いこと／叱る」を除くと、全体的にしつけ良好な保護者の数値は高く、規範意識に関わる項目だけでなく、基本的な生活習慣や自立性の涵養に関する項目についても、しつけ不全な保護者に比べて、しっかりしつけている様子が読み取れる。とくに、両者の差が広がっている項目に注目すると、しつけ良好な保護者は「叱る」だけでなく、善悪を教え、またほめるときにはほめている様子がうかがわれるのである。しつけ不全の保護者には、しかってばかりで、ほめることをしない者が相対的に多いことになる。このあたりに、しつけの良否を左右するポイントがあるのかも知れない。

また、「食事・服装に気を遣っている」や「なるべく自分でやらせる」の項目については、子どもの発達段階による影響があるためか、数値そのものは低めだがその両者の数値に開きが見られる。つまり、しつけ良好な保護者の方がわが子の自立性を考え、日常生活にも十分気を配っているようなのである。

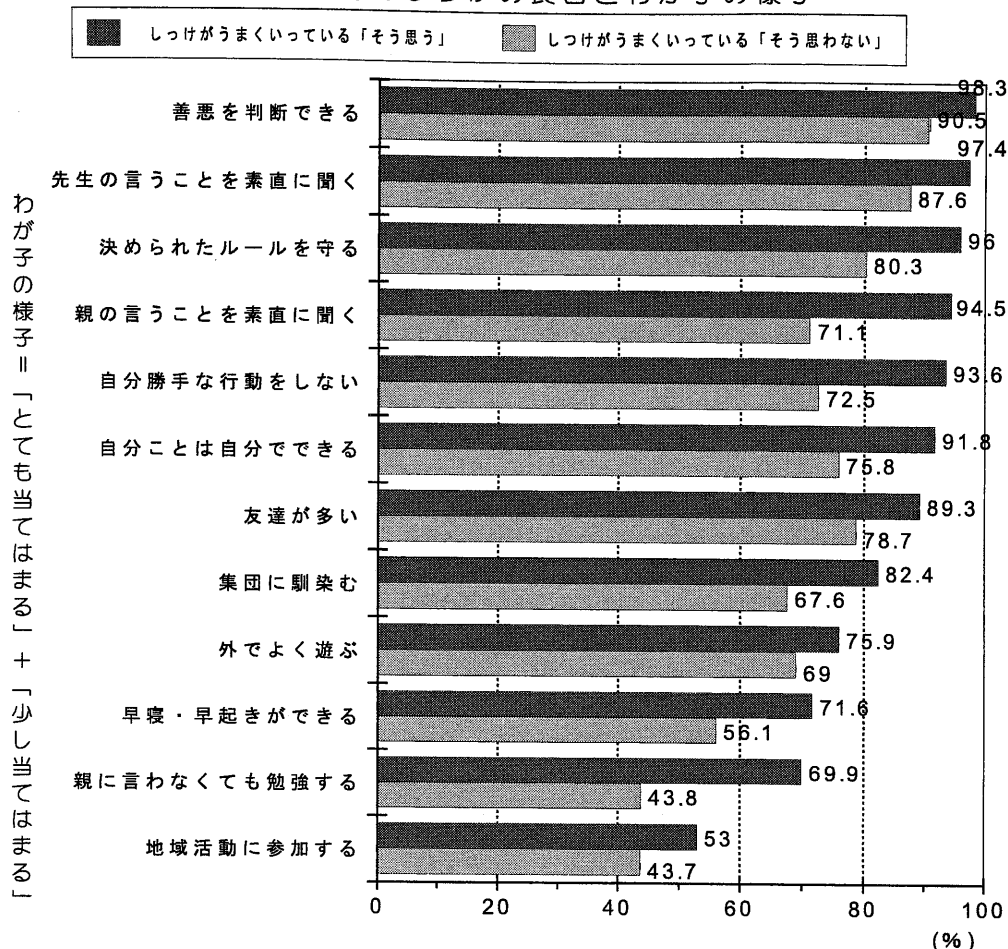
4. 保護者から見たわが子の様子ーしつけ良好な保護者の子は、規範意識が比較的高く、親や先生の言うことを素直に聞くー

保護者から見たわが子の様子についてはしつけ良好としつけ不全の保護者間にどの程度の差があるのだろうか。

図4-5は、わが子の様子に関する12項目の回答(「とてもそう思う」+「少しそう思う」の合計値)と保護者のしつけの良否に関する回答をクロス集計させた結果を図示したものである。ここでは、それら12項目に対する回答が肯定的であることを望ましいしつけの状態だと解するものとする。

そうすると、全体的に、しつけ良好な保護者の方が高い数値を見せているように、その子は各項目について望ましい行動をとる傾向にあると言える。ただし、「善悪を判断できる」は、しつけ良好な保護者が98.3%で、しつけ不全な保護者は90.5%と大きな差が見られていない。しつけ不全であっても、わが子は善悪の判断だけはしっかりしていると考えられる保護者が多いようである。また、「外でよく遊ぶ」以外のすべての項目で両者に10ポイント以上の開きが見られ、いずれもしつけ良好な保護者の数値が高い。

図4-5 保護者のしつけの良否とわが子の様子

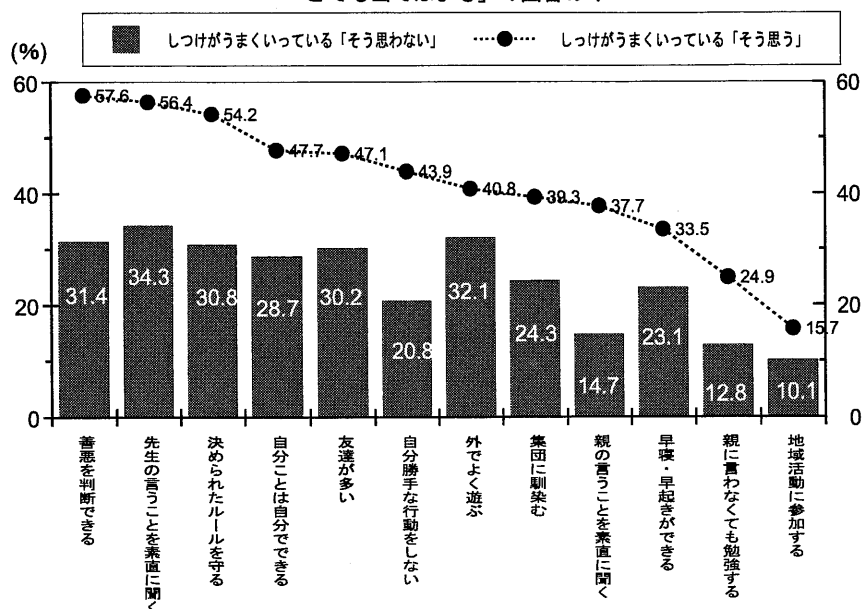


そこで、両者の数値の差異のみ注目すると、20ポイント以上の開きがある項目に、「親の言うことをよく聞く」、「自分勝手な行動をしない」、「親に言われなくても勉強する」の3項目があり、このほか15ポイント以上の項目に「早寝・早起きができる」、「決められたルールを守る」、「自分のことは自分でできる」の3項目がある。これら項目に関するものがしつけの良否を決めている可能性が考えられる。

しかしながら、わが子の様子に関する12項目に対する回答を「とてもそう思う」のみに絞ると、数値の傾向はだいぶ変化してくる。図4-6はその結果を示したものだが、これによると、すべての項目で、しつけ良好な保護者としつけ不全な保護者間の数値の開きが大きくなる。「善悪が判断できる」、「決められたルールを守る」は、図4-5に示した数値よりも大きく差異が見られるように、しつけ不全な保護者はわが子の規範意識に関する項目の数値が低く、その意味でわが子の規範意識の低さを感じているようである。

また、「先生の言うことを素直に聞く」は、図4-5に比べると、両者間の差が拡大している。しつけ不全の保護者の子は、先生の言うこともあまり善く聞かない様子である。両者の数値の差異のみに着目すると、「自分勝手な行動をしない」および「親の言うことを素直に聞く」の2項目は、しつけ良好な保護者の回答値は、しつけ不全の保護者の回答値の2倍以上上回っている。その意味で、しつけ不全の保護者の子は、自分勝手に、親の言うことに素直でないという傾向が著しいと言えよう。

図4-6 保護者のしつけの良否とわが子の様子
 -「とても当てはまる」の回答のみ-



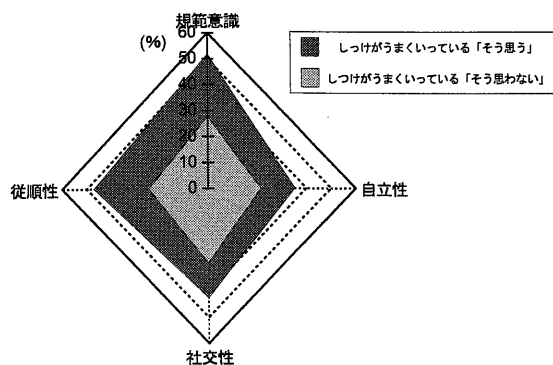
これら項目をいくつかの категорияに分類して、それぞれの項目の数値をカテゴリ別平均値を示すと、表4-5・図4-7のようになる。表4によると、「規範意識」が最も差異が大きく、24.2ポイントの差を見せ、しつけ良好な保護者は不全の保護者の1.87倍になる。まずは、しつけの良否には子どもの「規範意識」の在り方が関わっている可能性がある。

表4-5 わが子の行動特性の категория別平均値（「当てはまる」のみの回答）

カテゴリー名	規範意識	自立性	社交性	従順性
具体的項目 ※「地域活動に参加」は選択的であることから除外してある。	・決められたルールを守る ・善悪を判断できる ・自分勝手な行動をしない	・自分のことは自分でできる ・早寝早起きができる ・親から言われなくても勉強する	・外でよく遊ぶ ・友達が多い ・集団に積極的に馴染む	・親の言うことをよく聞く ・先生の言うことをよく聞く
しつけ良好	51.9%	35.4%	42.4%	47.1%
しつけ不全	27.7%	21.5%	28.9%	24.5%

次に差異が大きいカテゴリーは、「従順性(素直さ)」(差異 22.6ポイント)で、しつけ良好は不全の保護者の1.9倍になる。「自立性」(同 13.9ポイント)であった。「社交性」は4カテゴリーのうちで最も差異が小さかった(同 13.5ポイント)。いずれの項目もしつけの良否に関わるものと考えられるが、とりわけ「規範意識」「従順性」が大きく影響していると考えられる。

図4-7 保護者のしつけの良否とわが子の様子
 -カテゴリー別-

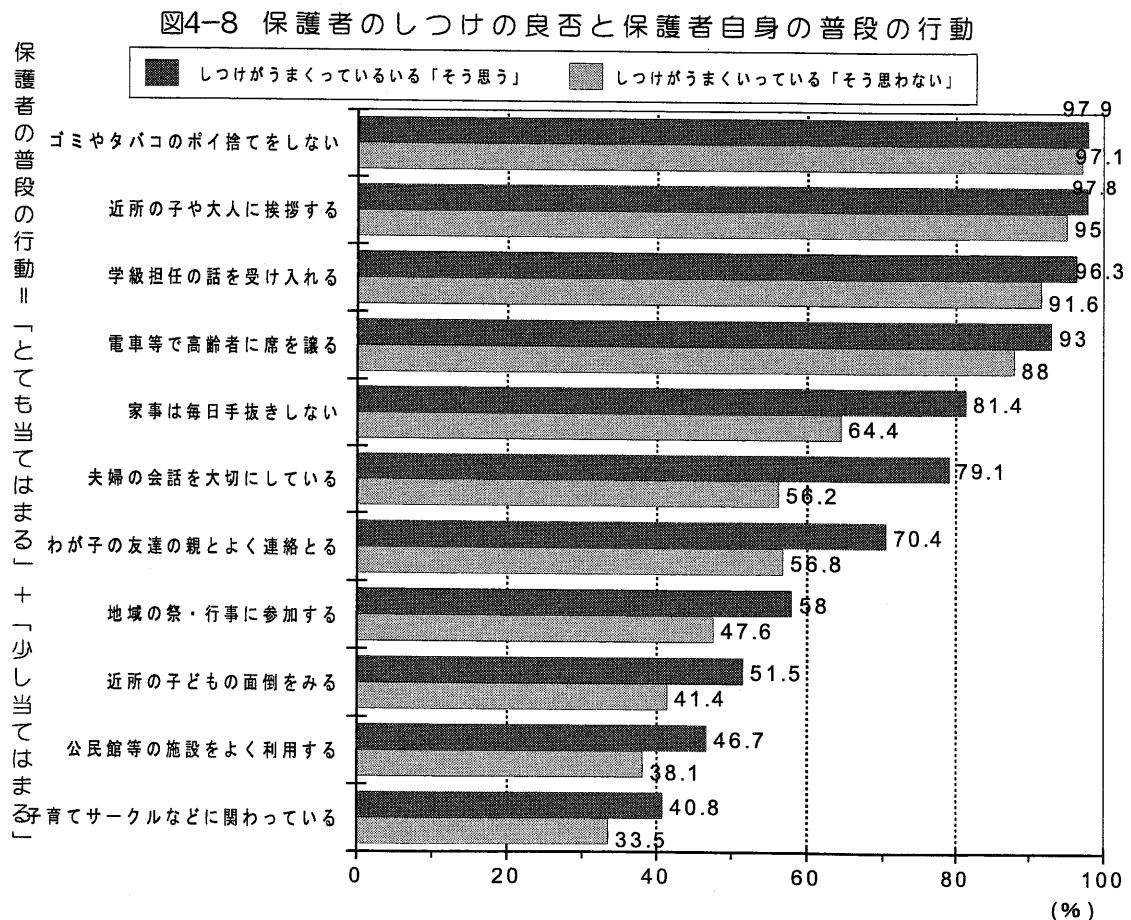


なお、「社交性」と「自立性」に関しては、しつけ良好な保護者の数値は高いことに変りないが、「規範意識」と「従順性」に比べると差は小さい。

5. 保護者の普段の行動—しつけ良好な保護者の方がマナーを守り、家庭生活を大切にしている—

保護者の普段の行動はしつけの良否にはどのような関係性が見られるだろうか。調査では、図4-8に示した保護者の普段の行動に関する11項目について、しつけの良否の回答とをクロスさせると、「ゴミやタバコのポイ捨てをしない」、「近所の子や大人に挨拶する」、「学級担任の話を受け入れる」、「電車で高齢者に席を譲る」など数値の高い項目については、しつけ良好な保護者と不全な保護者の間に著しい差がない。日常生活のマナーの在り方に関しては数値の差が見られなかった。

これに対して、図の中央部分に位置する項目、すなわち「家事は毎日手抜きをしない」、「夫婦の会話を大切にしている」、「わが子の友達の親と連絡をとっている」などの項目は、しつけの良好な保護者としつけ不全な保護者の間に大きな差異が見られ、前者の数値が高くなっている。家事や夫婦の会話など家庭生活を大切にしている保護者の方がしつけに関してうまくいっているようである。



そのほか、「地域の祭・行事に参加する」、「近所の子どもの面倒をみている」、「公民館等の施設をよく利用する」、「子育てサークルなどに関わっている」の項目は数値こそ低

いが、他項目と同様にしつけ良好な保護者の方が高い数値を示している。

以上のように、日常生活のマナーに関しては、しつけ良好な保護者とそうでない保護者に著しい差がなく、夫婦の会話など家庭生活や地域との関わりなどに差が見られたと言えそうである。だが、保護者の普段の様子に関する回答を「とても当てはまる」のみに限定するとやや異なるデータが現れる。

図4-9 保護者のしつけの良否と普段の行動
—「とても当てはまる」の回答のみ—

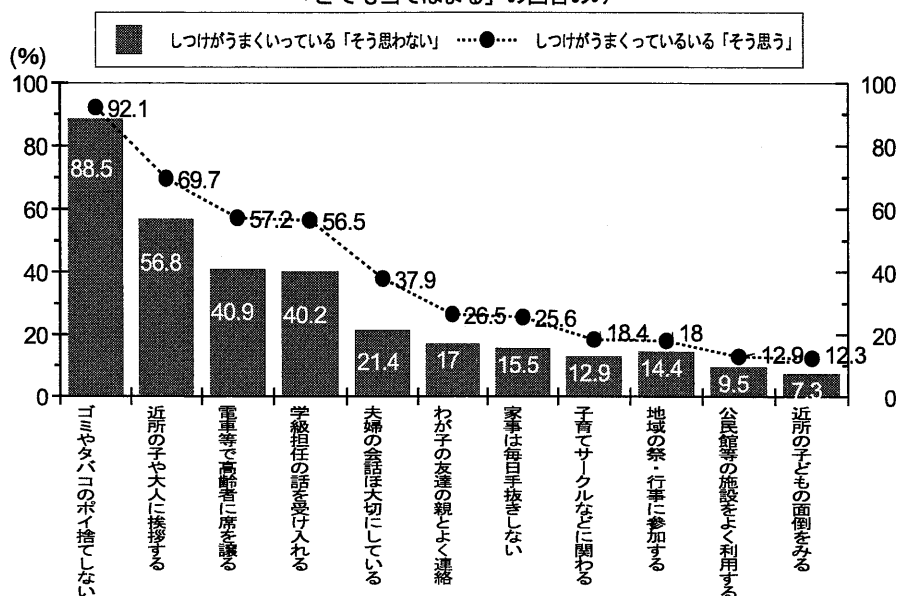


図4-9はその結果を示したもののだが、「近所の子や大人に挨拶する」や「電車等で高齢者に席を譲る」など「とても当てはまる」+「少し当てはまる」の合計値では大差がなかった項目については、差が若干広がってくるのである。「ゴミやタバコのポイ捨てをしない」も同様である。また、夫婦の会話など家庭生活に関しては差が縮まるものの、やはりしつけ良好な保護者の方が高い数値を示している。地域との関わりは、両者の差がさらに縮まり、あまり関係があるとは言えなくなる。

ようするに、しつけの良好な保護者はそうでない保護者に比べて、日常生活マナーを護る傾向にあるが、家庭生活においても夫婦で会話し、家事の手抜きをしない傾向にあると言えよう。ただし、地域との関わりに関してはさほど活発ではないようである。つまり、日常生活のマナーに関しても、しつけ良好な保護者の方が望ましく行動する傾向にある。この限りにおいて、子どものしつけに関しては保護者の普段の行動や生活の在り方が関係していることがある程度実証されたと言ってよい。

6. 保護者の学校との関わり—しつけ良好な保護者の方が「学校だより」等によく目を通し、学校行事や会合にも積極的に参加するなど学校に深く関わっている—

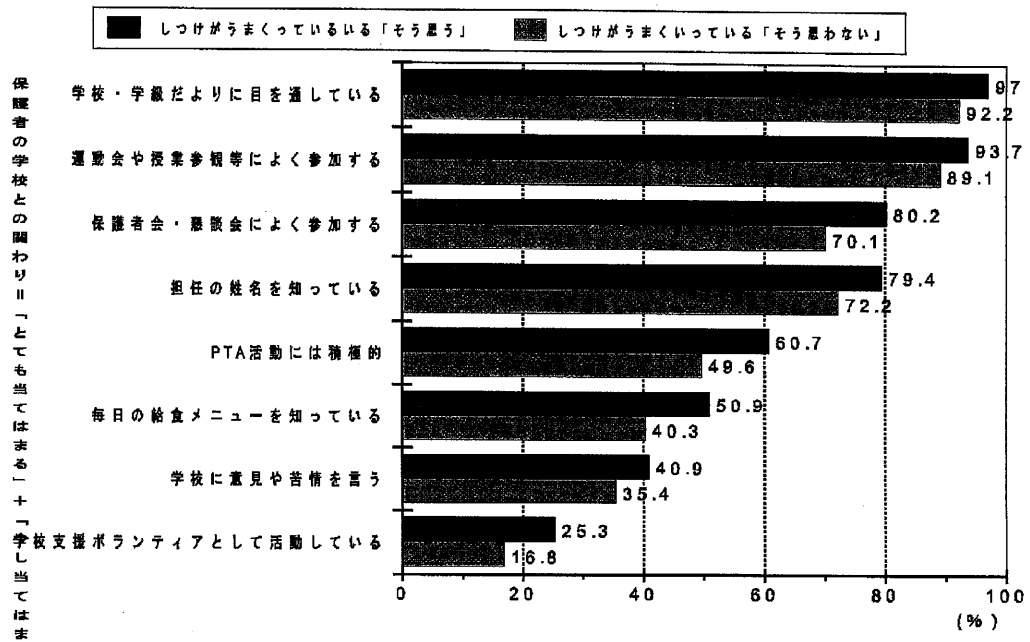
保護者の学校に対する関わりとしつけの良否の関係はどの程度見られるのだろうか。

図4-10はその両者の関係を示している。

図による、これまでの質問と同様に、図中の8項目すべてでしつけ良好な保護者の数値が高く、学校との関わりが強い傾向にある。数値の差のみに注目すると、「PTA 活動に積

極的に関わっている」や「保護者会・懇談会によく出席する」、「毎日の給食のメニューを知っている」の3項目で10ポイント程度の差が見られる。「学校支援ボランティア」も10ポイント近い差があることから、学校との深い関わりを持っている保護者の方がしつけ良好の傾向にあると言ってよい。

図4-10 保護者のしつけの良否と学校との関わり

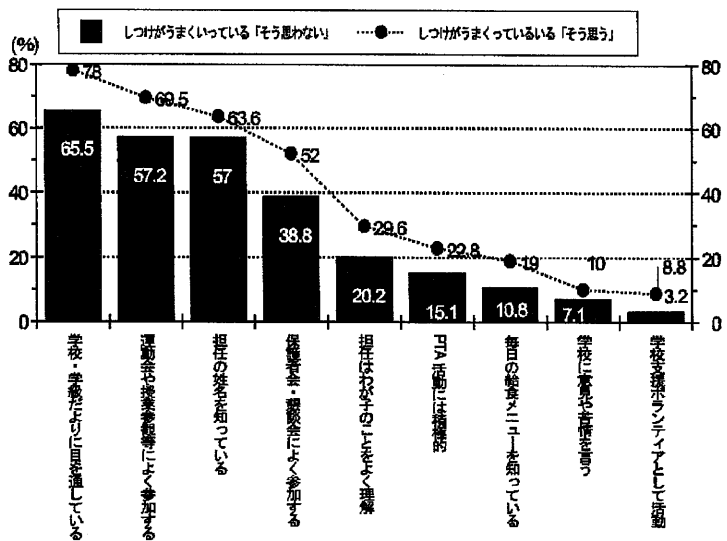


「運動会や授業参観等によく参加する」は数値が高く、差異が小さいように、しつけの良否に関わりなく多くの保護者は参加しているが、「保護者会・懇談会」になると、しつけ不全の保護者の参加が減少する傾向にある。しつけ不全の保護者には、イベントは好きだが会合を避けたがる者がいるのであろう。

ちなみに、近年の話題である保護者の苦情については、しつけの良否はさほど関係ないようである。

そして、学校との関わりの回答を「とても当てはまる」に限って図示すると、図4-11のようになる。その結果、「学校・学級だよりを目を通して」、「運動会や授業参観等によく参加している」などしつけの良否と強い関係が見られなかった項目では、差異が開い

図4-11 保護者のしつけの良否と学校との関わり
- 「とても当てはまる」の回答のみ -



ている。「保護者会や懇談会等によく参加している」も同様の傾向にある。

このことから、しつけ良好な保護者の方が「学校だより・学級だより」によく目を通し、学校行事や会合にもより参加する傾向があると言えよう。つまり、しつけ良好な保護者の方が学校との関わりが深く、日常化していると考えることができる。

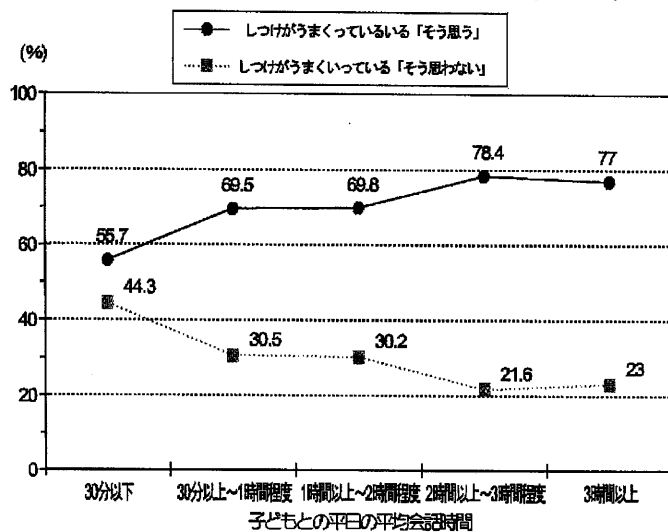
7. わが子との会話時間—しつけ良好な保護者は、わが子との一日の会話時間が長い傾向にある—

しつけの良否とわが子との一日の会話時間の長さの関係を見ることにしよう。図4-12はそのクロス集計結果を示しているが、この図を見て分かるように、わが子との会話時間が長くなるほど、しつけ良好な保護者とそうでない保護者との差が拡大していることである。

会話時間「30分以下」では、しつけ良好な保護者が55.7に対してしつけ不全な保護者は44.3%とその差は11.4ポイントだが、「30分以上～1時間程度」になるとその差は39ポイントに拡大する。さらに、「2時間以上～3時間程度」だとその差は最大の56.8ポイントまで広がっている。「3時間以上」でも54ポイントの差がある。

以上から、わが子との会話時間の長さとしつけの良否にはプラスの関係性があると言することができる。したがって、しつけが良好な保護者ほどわが子と長い時間会話する傾向があると言える。

図4-12 保護者のしつけの良否とわが子との会話時間(1日平均)



8. まとめ

最後に、以上の記述を要約して、本稿のまとめに代えておくことにしよう。

第一に、しつけがうまくいっていると考える「しつけ良好な保護者」には、自営業や専業主婦、PTA 役員等の経験者に比較的多く見られるが、しつけの良否は子どもの数や家族形態の違いなどとの関係はほとんど見られない。一人っ子の保護者が手を焼くという姿は見あたらず、また三世代家族の方がしつけ良好だとも言えない結果を示した。

第二に、しつけ良好な保護者の方が学校のしつけ不足を問題視せず、むしろ非行などの原因が家庭のしつけ不足にあると認識する傾向にある。

第三に、しつけ良好な保護者の方がわが子に善悪をしっかり教え、善いことをした時にはよくほめ、わが子の日常生活に気配りをする傾向にある。

第四に、しつけ良好な保護者の子どもの方が規範意識が高く、親や先生の言うことを素直に聞くなど従順である。また、社交性や自立性についても望ましい傾向を示している。

第五に、しつけ良好な保護者の方が自ら日常生活においてマナーをしっかり守り、夫婦の会話や家事などの家庭生活を大切にしている傾向がある。また、地域活動への参加についてもしつけ良好な保護者の方が若干活発のようである。

第六に、しつけ良好な保護者の方がわが子の学校の「たより」によく目を通し、学校行事や会合に積極的に参加する傾向がある。

第七に、しつけ良好な保護者はわが子との一日の会話時間が長い傾向にある。

以上から、しつけ良好な保護者は、自営業や専業主婦であり、学校の諸活動には積極的に参加し、自身の日常生活においてもマナーをよく守り、家庭生活を大切にするとともに、わが子との会話するよう心がけている様子が見られる。また、その子どもは、規範意識が高く、素直な性格で自立的な者が多い。

言うまでもなく、保護者のうち母親が専業主婦・自営業か、給与所得者かということがしつけの良否を左右する訳ではなく、その日常生活やしつけに対する認識の在り方が重要な要因になるであろうから、職業の有無等にかかわらず、保護者(回答者のほとんどが母親であることから、特に母親)が子どものモデルになるよう日常生活を送るとともに、家庭生活を大切に、わが子との時間を設けるなどの配慮がしつけの良否を左右するものと考えられる。これらの点に、今後、家庭教育力を高めるためのヒントがあるものと思われる。

(佐藤 晴雄)